



おはようございます！！
藤林イザヤです。



■聖書箇所です！

テサロニケの信徒への手紙一 2.1-16



【今日の御言葉】です！



「13 このようなわけで、
私たちもまた、
絶えず神に感謝しています。

私たちから
神の言葉を聞いたとき、
あなたがたは、
それを
人の言葉としてではなく、
まさに神の言葉として！！
受け入れたからです。

この神の言葉は、
信じているあなたがたの内に
今も働いているのです！！」

(テサロニケの信徒への手紙一 2.13

: 協会共同訳)

※以下の引用は、全て協会共同訳です。

ライフチェンジング！
メッセージです。

『カッティング・エッジ！』

↓ ↓ ↓

<https://youtu.be/pmB0sF3omW8>

.....

今日も、
テサロニケの信徒への手紙一から、
恵みを受けましょう。

パウロは、
1章で、
深い感謝を語りました。

それは、
テサロニケの信徒たちが、
神様の前に、
しっかりと歩んでいる、
ということが、
確認できたからでした。

取り分け、
パウロたちが示した
新しい人、
新しい生き方を、
新しい命に即して受け入れ、

それに

「倣って！！」

生きていたからです。

そのことを、
テモテからの報告で、
よく掴むことが
できました。

そればかりでは
ありませんでした。

テサロニケの信徒たちの
新しい生き方を見倣う
諸教会が、

マケドニア州、
アカイア州の中にも、
起こっていたことも、
確認したからでした。

恐らくは、
そういった情報も、
テモテが
持ち帰ったのでしょう。

これは、
大きな喜びでした。

さらに、
テサロニケの信徒たちが、
酷い苦しみを味わい、
その中でも、

喜びに溢れた歩みを
貫いたことも
思い起こしました。

そのことも、
大きな感謝となったのです。

.....

さて、
この段になって、
パウロは、
テサロニケに開拓へ
出向いたことについて、
深い感謝を表明していきます。

1節には、

「無駄ではなかった」

と語ります。

人は、

自分の苦勞したことが、

報われた時に、

無駄では無かった……

ということを、

実感します。

テサロニケの教会の現実には、

まさに、

パウロにとっては、

大いなる報いを得た思いに

してくれたのです。

2節では、
パウロ自身が味わった、

「苦しみ」

と

「辱め」

について触れます。

フィリピで、
相当な苦労があった、
ということが分かります。

恐らくは、

侮辱され、
不当な扱いを受けた、
ということでしょう。

そういう痛みを覚えて、
そのことを振り返りながらも、
テサロニケに行って、
本当に良かった、
心くじけて、
気力が萎えて、
行かなかつたら、
あなたたちと出会うことも、
こうして、
キリストにある家族になることも
なかったからだ、
という思いを、
表現しているのです。

人生においては、
この苦勞は、
何のために？
と言うような思いに
なることもあります。

次から次へと、
トライしますが、
上手くいかない時に、
徒勞感や無力感に
苛まれることもあるのです。

パウロも、
例外ではなかったのです。

人間的に見れば、
心が折れてしまつて、

投げ出すような状況だった、
というのです。

でも、
パウロは、
立ち上がって、
テサロニケに向かいました。

どうしてでしょうか？

そうです。

「私たちの神に
勇気づけられた！！」

からです。

そうです。

信仰者は、
手に余るような
とんでもない渦に、
巻き込まれることも
あります。

そんな時に、
どうやって気力を
奮い起こすのでしょうか。

ただ単に、
大丈夫だ、
というだけでは、

心許ないことも、
多々あります。

自分では制御できないことは、
幾らでもあるからです。

でも、
そんな時です。

主なる神様が、
力を下さいます。

勇気を震い立たせて
下さるのです。

パウロも、
そうやって、
神に勇気を頂いて、
前進したのです。

.....

3 節、
4 節には、
パウロの持っていた
確信が表明されます。

パウロが持っていた
宣教への思いは、
不純なものでは
ありませんでした。

ここで不純というのは、
誰を意識してのことか？
ということが
問われます。

人によく見られたい……

社会的に評価されたい……

できれば、
褒めてもらいたい……

こういう
社会的な承認欲求は、
誰しも持っていますね。

勿論、

この欲求自体が、
悪いものではありません。

でも、
誰に求めるかで、
確信を持って歩めるか、
揺れ動いてしまうかが、
決まります。

この点が、
大事なのです。

周りの人たちというのは、
順調な時は良いですが、
一旦、
調子が悪くなりますと、
手の平を返したような

態度に出ることは
往々にして起こります。

これは世間で、
よく見られるものです。

でも、
大事なことがあります。

人に称賛を受けようと、
罵詈雑言を浴びせられようと、
不断無く前進するには、
そういったことで
揺るがない基軸を持つことが
大事なのです。

これが、
神を信じる信仰です。

パウロが、
不純な動機だと言うのは、
神に対する思いでは無く、
人の思惑に左右されることを
指しているのです。

なので、
神に認められて、
この福音の務めに、
携わっているのだ、
ということを明言するのです。

神の承認こそ、
神の子・キリスト者が、

しっかりと見つめ、
揺るぎない基軸として、
持つべきものなのです。

そして、
そればかりでは
ありません。

最も大切な神の福音を、
託されているからです。

最も大事なものは、
大事な人に託しますね。

いい加減な人に
託すことはできません。

なので、
価値ある存在に
託すので、
私に、
また
テサロニケの信徒たちに、
託された、
というのです。

神の福音は、
何をできる、
何をできない、
ということに関係なく、
神様に救われる恵みが
開かれたからです。

血筋として、
ユダヤ人でなくても、
過去になにがあっても、
どんな立場の人であっても、
神の子とされる救いが
与えられるのです。

このことを、
神様に託されたからこそ、
その負託に応えようと、
力強く歩んでいるのでした。

意気に感じる、
という言葉がありますね。

まさに、
神様の依頼に対して、

意気に感じて、
神様をお喜ばせするために、
歩んでいるのです。

子どもにとって、
最も喜ばせたい存在は、
親ですね。

親が喜ぶ顔を見たい、
というのは、
強い動機になります。

なので、
親の期待に応えようと、
頑張るのです。

こうした

外からの刺激があつてこそ、
人は成長していくからです。

神の子・キリスト者も、
最も良い刺激を、
親である神様から
受けて行く中で、
成長することができます。

.....

5節以降には、
パウロがどのように、
テサロニケの人たちに
向き合ったのかを
述べています。

パウロたちが、
金銭を求めたりして、
こびへつらったりは
しませんでした。

これは、
テサロニケの信徒たちも、
良く知っていることでした。

常に見つめていたのは、
神様の誉れだけだったのです。

なので、
キリストの使徒として、
神様に立てられた権威をもって、

神の言葉を語り、
福音を告げ知らせたのです。

しかし、
厳めしい教師のようではなく、
幼子のように、
つまり、
優しい言葉遣いで、
向き合ったのです。

ちょうど、
幼子に噛んで含める、
母親のような向きあい方を
したのでした。

それは、
愛おしい存在だと

見なしていたからです。

その愛おしさは、
前段では、
どんな犠牲を払っても
惜しくない！！
という思いでした。

それは、
自分の命を捧げても、
惜しくない思いだったのです。

人は、
愛する者のために、
自分の命を捧げても、
惜しくないのです。

取り分け、
自分の子どもには、
そういう思いを
抱くものです。

今井久美子師は、
お2人のお子さまを、
立派に育て上げてこられました。

今、
20歳過ぎと、
来春高校生になる、
お子さまがおられます。

2人とも、
突出した才能を

お持ちです。

まあ、
努力型の天才……！！
なんだろうと、
端で見ていて思います。

でも、
その幼少期は、
想像を絶するような
戦いがありました。

2人とも、
喘息がありました。

アレルギーが

激しいので、
日常生活で、
ちょっとした花粉や
埃などが舞いますと、
大変です。

なので、
春先からは、
外で洗濯物を干すことは
できません。

また、
息子さんは、
川崎病を発症して、
その根治のために、
長期間の治療と療養を
余儀なくされました。

そういうことは、
普段の久美子師からは、
想像できません。

でも、
だからこそ、
必死になって、
お子さまに向きあい、
愛おしむ心は、
人一倍！！
いや、
人3倍！！
いや、
それ以上なのです。

ですから、
話をしているとも、

どんな話からでも、
お子さまの話に通じます。

何故か、
全然関係ないことを
しゃべっていたのに、
気づけば、
お子さまの話に帰着する……
というのは、
ほぼ、
毎回のことです。

全ての道は、
ローマに通ず！！
という諺があります。

久美子師の場合は、

全ての話題は、
お子さまに通ず！！
なのです。

でも、

「愛おしむ」

というのは、
そういうものでしょう。

パウロも、
こうして筆を執り、
便りをしたためているのは、
まさに、
こうした母親の思いが、
ほとぼしった現れです。

ここで、
自分の命、
と語っているのは、
単に命だけではありません。

自分の全存在！！
を賭けても惜しくない！！
という意味です。

愛する、
というのは、
そういうものです。

.....

9節には、
パウロたちが採った
宣教の在り方について、
触れています。

パウロは、
使徒言行録によると、
天幕造り、
という仕事に
従事していたことが
分かります。

つまり、
教会を開拓すると、
当然ながら、
信徒はいません。

献金など、
望むべくもありません。

ですから、
自分で生計を立てて、
食い扶持は確保しつつ、
伝道すること
なるのです。

パウロの場合は、
天幕造りが、
自営業として稼ぐ道、
だったのです。

ここから、
自営業なり、
自分で食い扶持を確保して、

伝道することを、

「天幕造り伝道」

英語では、

“Tent Maker Mission”

「テント・メーカー・ミッション」

と言うようになりました。

京都中央チャペルでも、

今井直喜師と

加瀬宣雄師は、

テント・メーカー・ミッション

として、

それぞれ、

自らの仕事を持ちつつ、

伝道の働きをなさっています。

とっても、
貴重な存在なのです。

また、
パウロの開拓者としての
生き様に、
直系の系譜を持っている

「宣教者魂！！」

なのです。

テサロニケの信徒たちも、
そのことを理解していました。

京都中央チャペルでも、
兄姉はそのことを
理解して、
祈り支えて下さっています。

.....

10 節には、
敬虔に振る舞った、
と語ります。

これは、
神様に対する姿勢が、
真っ直ぐであったことを
物語ります。

勿論、
そのことは、
人に対する姿勢に、
現れてきます。

非難されることが
ないように、
誠実に向き合ったのです。

それは、
父親の態度だった、
と語ります。

先ほどは、
母親を例に出しながら、
どれ程愛おしく思っているか、

ということを、
物語りました。

今度は、
父親のように、
と語ります。

特に、
テサロニケの信徒たちが、
神様の御心に沿って
生きていくように、
という励まし、
慰め、
そして、
勧めを
強く打ち出したのです。

父親という存在は、
ある面、
こうしたディスイプリン、
原則を教える、
と言う役割を示します。

特に、
神様が、
1人1人を
幸せに生きるようにしたい！！
という強い願いを
持っておられるからです。

その思いを、
ハッキリと
説き教える、
という役割があるのです。

神様と共に生きるって、
ホントに素敵なことだなあ、
という実感をもって
生きていくことは
大事ですね。

その感覚を、
是非とも持って欲しい！！
という神様の思いが
招きとしてあるのです。

そこには、
神の子・キリスト者にとって、
最も似つかわしいし、
ジャストフィットする
生き方が
示されているからです。

.....

主イエスを信じて、
洗礼を受け、
歩み出すと、
新しい命が溢れます。

その命に相応しい、
生き方、
というのが
あります。

そのことを、
単に道徳的に優れた生き方、
ということではなく、

神様が招いておられる、

「卓越した生き方！！」

として、
提示したのです。

パウロ自身の
生き様にも、
それは浮き彫りに
なっていました。

それを、
テサロニケの信徒たちは、
額面通りに受け止めて
くれたのでした。

それが、
13 節以降に
語られます。

そして、
聞いただけでは
ありませんでした。

テサロニケの信徒たちは、
自分で試したのです。

生きてみた、
ということです。

新しい命に即して、
今までの古い生き方を、

脱ぎ捨てました。

神様の基準に、
歩み始めたのです。

神様の言葉を、
自分に適用させていきました。

今までにないような、
世界観が
開かれました。

人生観が、
変わって行きました。

当然ながら、
視点が変わると、
物事の受け止め方も、
変わります。

極度の苦難が
現実にあっても、
聖霊によって喜ぶ、
という世界が
開かれるからでした。

それは、
神様の語り掛けを、
素直に受け取り、
日ごとに生きていく中で、
培われたのです。

.....

このように、
テサロニケという
小さな町で、
一心不乱に歩いて行くと、
結果的には、
大きなうねりが
生じたのです。

14 節で、
テサロニケの信徒が、
明示した生き方は、
ユダヤの教会、
つまり、
エルサレムの教会にも、
影響を及ぼしました。

逆輸入するべき、
キリスト信仰の在り方となった、
というのです。

また、
マケドニアやアカイアの
諸教会においても、
同じように、
模範とするべき、
生き方を示したからでした。

.....

ところで、
ここまでパウロが、
テサロニケの信徒に、

丁寧に語っているのは、
どうしてだったのでしょうか？

それは、
テサロニケの教会が
直面した苦しみが、
ユダヤのエルサレム教会を
皮切りにして、
初代教会の全てに、
同じように及んだからだった、
のです。

14 節の後半で、
同胞によって、
苦しめられた、
と語ります。

同胞ですから、
テサロニケの町の人々……
ということも
あるでしょう。

でも、
ユダヤでも、
他の地域でも、
ということですから、
共通している同胞は、

「ユダヤ人！！」

だということが、
分かります。

なので、
15 節では、

明確にユダヤ人を
名指しして語るのです。

ユダヤ人は、
勿論、
創造主なる神を信じる、
敬虔な民です。

パウロにとっても、
勿論、
同胞です。

でも、
最も激しい迫害を、
繰り広げたのも、
ユダヤ人だったのです。

パウロにしてみれば、
自分もその一翼を担った
過去があります。

なので、
分からないでもない、
という思いは抱いたでしょう。

でも、
同時に、
分からないでしてしまっている、
迫害の現実は、
非常に悲しむべきことでは
あったのです。

つまり、

ユダヤ人が、
邪魔しているのは、
異邦人の者たちが、
救われて、
神の子になること、
だったからです。

これが、
あらゆる人々に敵対する、
ということでした。

主なる神様の願いは、
異邦人も含めて、
全ての人が救われることだ、
という強い確信を、
抱いていました。

なので、
それがまだ分からず、
反対ばかりをしている
ユダヤ人の現状には、
怒っていますね。

パウロは、
結構激しい感情を、
表に出す方だった……
ようですね。

特に、
手紙においては。

「1 さて、
あなたがたの間で
面と向かっては弱腰だが、

離れていると強気になる、
と思われている、
この私パウロが、
キリストの優しさと
公正さとをもって、
あなたがたに願います」
（コリント信徒への手紙二 10.1）

と、
自分でも
書いているくらいですから。

ここでは、
同胞のユダヤ人に対して、
こんなことでは、
厳しい神の怒りが、
臨んでしまう……
ということを、
激しい感情の高ぶりも

感じながら、
語っているのです。

そこには、
主イエスを十字架につけた
現実が
想起されました。

また、
旧約聖書の時代にも、
神の託宣を語った、
預言者も、
理解されない、
という壁で、
押しつぶされ、
殺されたことも、
多々ありました。

まさに、
キリスト信仰は、
旧来のユダヤ教の枠を
破って行くような
うねりを作っていたからです。

そのことが、
今、
パウロたちの働きにも、
起こっていたのです。

異邦人を邪魔する、
というのですから、
恐らくは、
後に、
使徒会議の話題となった、
割礼を強要する、

というようなことだったのでしょう。

そういった人たちが、
エルサレム教会を
揺るがしました。

そして、
散らしていくこと
になったのです。

また、
ステファノなどの、
教会のリーダーも、
殺されてしまう……
ということも
起こったのです。

これは、
神様の喜ばれるところではなく、
逆に、
怒りを買うことだ……
という強い問題意識を、
述べて、
この段落を終えるのです。

……

さあ、
今朝は、
13 節から
恵みを頂きましょう。

パウロは、
この箇所で、
常に、
どんな時にも、
感謝していることが
ありました。

それは、
後半の内容でした。

「13b 私たちから
神の言葉を聞いたとき、
あなたがたは、
それを
人の言葉としてではなく、
まさに神の言葉として！！
受け入れたからです。

この神の言葉は、
信じているあなたがたの内に
今も働いている！！
のです」

(テサロニケの信徒への手紙一 2.13b)

それは、
テサロニケの信徒たちが、
信仰によって、
受け入れた神の言葉が、

「今も働いている！！」

ことでした。

つまり、
テモテの報告によって、
ユダヤ人、

正確に言うと、
ユダヤ主義者たちが、
テサロニケの教会にも、
やってきたのでしょう。

そして、
教会がかき乱される、
ということも
起こったのでしょう。

でも、
それでも、
テサロニケの信徒たちは、
揺るぎませんでした。

パウロたちから、
受け止めた教えを、

神の言葉！！

として、

しっかりと根付かせて
行っていたからです。

自分たちの信仰を
否定するかのような言葉にも、
こびへつらうことは
無かったのです。

今働いている、
ということは、
その御言葉によって、
今生きている、
ということでした。

ということは、

既に、
パウロがテサロニケに
滞在していた時よりも、
遥かに逞しく、
立派に成長している！！
ということでも
あったのです。

子どもは
確実に成長します。

成長していく中で、
親が伝えたことを踏まえて、
それを乗り越えて行く姿は、
頼もしい限りですね。

孔子は、

このような現実を、

「後生畏るべし」

と語りました。

後で生まれた者が、
先に生まれた者を、
乗り越えて行く様子です。

畏るべし、
というのは、
孔子です。

侮るな、
バカにするな、
と言う警句です。

パウロは、
そのことを、
テサロニケの教会に向けて、
感謝する！！
と言うのです。

このような流れから、
キリスト信仰は、
2000年の時を経て、

「今も働く！！」

のです。

あなたは、
今、

パウロ自身は、
目の前にいないでしょう。

でも、
パウロが掴んで
語ってくれたことを踏まえて、
新しい現実に向き合います。

そこには、
やんごとない、
戦いもあります。

(※注
止むことが無い、
という意味で、
やんごとない、
を使っています)

ともあれ、
そういう中で、
神の言葉は生きていて、
今も働くのです。

それは、
語られた大元の神様が、
生きておられるからです。

それを踏まえると、
キリスト信仰は、
常に、
今が最先端である！！
ということが出来ますね。

時代の切っ先を、
歩んでいるからです。

切っ先のこと、
最先端のことを、
英語では、

“Cutting Edge”

「カッティング・エッジ」

と言います。

ということは、
キリスト信仰において、
あなたは、
カッティング・エッジ！！
の存在なのです。

なので、
日ごとに、
更新され続ける！！
ということですね。

まさに、
このことを、
パウロは感謝したのです。

キリスト信仰は、
マトリユーシカでは
ありません。

生きた記録を、
更新し続ける世界です。

今も働く、
というのは、
日ごとに新しい世界が、
創造されていくことなのです。

これを、
しっかりと、
掴みましょう。

そして、
今日もまた、
神の子・キリスト者人生を、
更新して行こうでは
ありませんか。

ご一緒に祈りましょう。

天のお父様。

今日も

新しい命を下さり、
有り難うございます。

今、

カッピング・エッジ、
として生かされていることを
感謝します。

今日もまた、

神の子・キリスト者人生を
更新していきます。

導いてください。

全てに満足して、
歩んで行くことができます。

主イエス・キリスト様の
お名前によって祈ります。

アーメン。

God is good! All the time!



God bless you! God, Be with You!



今日は、
この辺で失礼いたします。

最後までお読み頂きまして、
ありがとうございます。

また、メールいたします！



【中央チャペリタン】

(Chuo Chapelitan)

～Gospel for the Millions～

発行者：藤林イザヤ

発行者住所：〒604-0845

京都市中京区二条殿町 540

T E L : 080-4295-0991

E-mail : izaya@chuochapel.com

<京都中央チャペル 感謝献金サイト>

⇒<http://blog.livedoor.jp/daijofuda-doglovers/archives/12807278.html>

藤林からのメールを

受け取りたくない場合には、

コチラ ⇒<https://canyon-ex.jp/fx19152/lCELSsc>

から受取拒否の設定を

してください。

※一旦、解除してしまうと、

今後のコンテンツが

受け取れなくなりますので

十分ご注意ください。

